

Title	<紹介>神谷かをる著『古今和歌集用語の語彙的研究』
Author(s)	林, 浩恵
Citation	語文. 2002, 78, p. 55-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69003
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

神谷かをる著『古今和歌集用語の語彙的研究』

林 浩恵

本書は古今和歌集（以下「古今集」と略称する）の用語について、和歌に好まれるか否かという点を指標として語彙・語構成的に考察したものである。和歌に用いられない、或いは用いられることが少ない語を「非歌語」と位置づけ、それに対する考察も行うことにより、古今集の語彙の新たな側面を示したものととなっている。

第一章は、「コト」ということばを通して古今集における言語意識の考察を行っている。これが本書の根幹をなすと言える。

古今集では「コト」に関して「言」と「事」との分化がより明らかに、より意識的になっており、この分化の時点において「言」はモノそのものでも「事」でもない抽象化された概念となる。例えば「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（古今集四一・在原業平）では、「都鳥」はミヤコドリというモノを示しながら同時にミヤコという名を持つ鳥として言語的分析がなされ、ミヤコは都を指示する「言」と化する。しかし都そのものを指すというより都にまつわる諸々の観念を含んだ「事」を示す語となり、「言」は「事」に化す。第一章は、物・言・事がこのように循環相通する有様を明快に述べ、今はとて返す言の葉拾ひおきておのがものから形見とや見む」（古今集七三七・近院の右大臣）のように、古今集は「コトバ」ということばさえ歌の素材とする、極めて言語意識の高い歌集であることを示すのである。

そのような言語意識のもとに編まれた古今集において、歌語と非

歌語にどのような特徴があるのかを以下の章で探る。

第二章では非歌語から古今集の用語の特徴を指摘する。大きな特徴として、身体語彙が少なく、「死ぬ」「涙」など一般に歌語として好まれない語も、恋の巻で比喩的用法として用いられる場合には好まれたことなどを挙げる。さらに訓読語を含め非歌語を決定する作業を行うが、それは同時に歌語を決定することでもあり、そこから、感情的語彙が少なく大げさな動作は好まれないという歌語の性格の一面を描きだす。

第三章では万葉集と比較しつつ古今集の造語法を探る。万葉集になく古今集に見られる語は撰者の歌に多いが、その造語法を見ると、万葉の造語法にならったものや万葉の語の派生や複合によるものが四分の三を占める。撰者たちは伝統を踏まえつつ新しい語を探り、古今集にふさわしい用語を選んでいることがここに鮮やかに了解される。更に、孤例の語を見るなかで、単純語を熟語にしたり派生語を新たに作ったりしながら和歌に撰取していったさまを述べる。

第四章では詩語と歌語との関連について述べる。万葉集における漢語の和語化という方法（訓読翻訳など）や、それによって生じた歌語が、平安時代にも受け継がれていることを指摘する。

本書は歌語・非歌語に対する考察を行い用語の特徴を指摘する一方、いかにして歌語が生成されていったのか、万葉集の造語法や詩語との関係を語彙的に解き明かしたのものとなっている。本書は歌語の問題に対する幅広い視野を呈示しており、歌語を考える上で必読の書であろう。

（和泉書院、一九九九年三月、一三七頁、定価七〇〇〇円）

—— 本学大学院博士後期課程 ——